

学校はよくなるか

文部科学省の課長クラスと日教組と進歩的文化人が推進したゆとり教育は、世間の常識に敗退した。今、いたるところで「教育改革」が話題になっている。学校教育は指導要領の改善や制度改善では何もよくなるらない。教育改革の最大の課題は難問中の難問、人間の改造である。

アメリカをまねたゆとり教育

十年一昔というが、その一昔前、導入した根拠となる考え方である。学校教育についての私の考え方を述べる。これは平成十五年の雑誌「商工につばん」の「社長業の鉄則」の一部に少し手を加えた文である。

◇◇◇
昨年行われた全国学力調査（小学五年生から中学三年生まで四十五万人対象）では、六年前（平成八年）よりも正答率が四六％も低下した。ゆとり教育がはつきり学力低下という結果を出した証拠である。これを踏まえて「学力低下論争」が起きている。現場の教師が多数参加したテレビ番組で、文部科学省大臣官房審議官のH氏はこう言った。

「学力というものをどうとらえるかが、変わってきています。知識の量や基礎は大切ですが、考える力、判断力、表現力というところまで学力をもう少し幅広くとらえて（こうして）、新しい学力を身につけるために、時間的な余裕を学校の中で作り出して、子供たちを主体的に学んで、成就感、達成感を得させるような授業をいま、先生方に工夫していただいているところなんです。（この新しい学力をつけるには）一斉授業ではだめです」

国語、算数の授業時間を削って年間一〇六時間の「総合」学習を

分で考えることができないから、何を経験させても何も学ぶことはない。基礎学習を目的にして軽減し、子供に楽をさせ、子供に迎合する見苦しい姿勢は何か。

小学校で覚える漢字を一〇〇六字から八二五字に減らした。「私」という漢字は小学校では読めればいい、中学校へ行ってから書ければいいんですよ。円周率は三・一四だが三でもいいですよ。パソコンの使い方を教えれば、計算などさせる必要はありません。インドの小学生では九九は19×19まで暗誦させているがムダなこと。小学校で九九を覚えさせることに疑問を感じています……。

この姿勢は個性と自主性尊重の民主教育に由来する。戦後アメリカは日本の学校制度を変えた。有

十年後の今、ゆとり教育は見直され、学校教育は旧来の方式に戻されつつある。ゆとり教育は暗記主体のつまみ食い教育を否定して生じた方針であった。したがって旧来の方式とは「暗記つまみ食い教育」ということになる。

授業時間を増やし、教科書を厚くし、テストテストで追いついていく。私は「自由でのびのび」よくこのほうがはるかに優れた教育法だと思っている。

高校大学の入試ではより多く覚えた、勉強ができる子が合格する

経営管理講座 296 染谷和巳

なかつた。だからあと一年かけて覚える（勉強する）のである。私が受験をした五十年以上前もゆとり教育の世代も、子供は暗記重視のつまみ食いの勉強で競争した。社会（会社）は仕事ができる一人前の社会人を求めるが、高校や大学はペーパーエリートを作り出すことに専心していた。

小学校、中学校での国語算数の基礎学力をつけるには「つまみ食い」が最適である。漢字の読み書きや文章を理解する力、たし算ひき算かけ算割り算、小数分数などの計算能力は大量にこれでもかというほど時間をかけて勉強させる。社会人の基本は「読み書き計算」能力につくるからである。

最重要課題は教師の質の向上

旧来の学校教育は何が優れていたのか。答は明快。教師である。生徒から尊敬される教師が揃っていた。レーガン大統領が派遣した教育視察団はそこを見た。教師は指導者である。アメリカの学校教師は生徒の友達や下僕になっている。教師の立場を上にあげなければ学校は立ち直れない！視察団の報告を受けてレーガンは改革に着手し成功した。

日本の学校になぜ尊敬される教師がいたか。私の小学校低学年時の島田先生はカーキ色の陸軍の軍服で授業をした。背広がなくて外に出られるのはこの服しかなかったのだらう。その後の板垣先生、須賀先生も戦争帰りの板垣先生は肺結核を、物を六十回噛むことで克服したと自慢していた。須賀先生は栄養不良でヒョロヒョロの体だった。

中学校の担任の松尾先生は東京教育大学出の新米だが、樺太からの命からがらの引き揚げ者だった

に基礎学力を身につけた子が学びたい分野を選んで勉強する。

現在大半の高等学校が、大学入学のためのつまみ食い学習を行っている。高等学校は工業商業のみならず普通科も卒業したら一人前の社会人として遇される人を作る教育をしなければならぬ。

また大学はペーパーエリートを出すことを恥じねばならぬ。立派な社会人とは知識教養人格の人間性が優れた人である。大

学は知識を与えるのみで、教養と人格には手を触れもしないで学生を送り出している。この問題は入学式を秋に行うといった「改革」では解決しない。

つまりゆとり教育路線の変革によって、小中学生の学力低下問題は改善されるが、それ以外の教育問題は何も解決しないのだ。

た。英語の岡田、国語の高橋、社会の染谷といった先生方も青年期の苦労が顔を作っており、生徒は尊敬してよく言うことを聞いた。先生は皆恐くて、ほめられれば天に昇るほど嬉しかった。

こうした先生の共通点は軍隊や社会で苦労をしてきた点である。こうした先生が全国におり、戦後三十年、昭和五十年までは日本の小中学校の主力だった。日教組はあつたがこうした先生方は授業と生徒指導を第一にしていたので熱心な組合活動はしなかった。

私は教師にならうと教育大に入り就職課程の「教育概論」の授業を受け、小中学時の尊敬する先生方を思い出し、こんな授業が何になると、教師志望を捨てた。

それ以来教師は大学を出て実社会経験を積んで三十歳になってから学校に勤められるようにすべしと思っている。たとえ小学校教師でも人間性（知識教養人格）が上等でなければ、生徒に尊敬される指導はできないからである。